幼児・児童のムンプス

神奈川県立こども医療センター感染免疫科医長
鹿　間　芳　明
（聞き手　池田志孝）

幼児、児童が軽度の発熱と耳下腺部の腫脹、疼痛を訴える場合についてご教示ください。

1．ムンプスを鑑別する簡便な迅速診断法はありますか。

2．ムンプス以外にどんな疾患が考えられますか。また、その治療法について。

＜埼玉県開業医＞

池田　鹿間先生、流行性耳下腺炎と、その鑑別すべき疾患についての質問が来ています。まずムンプスというのはどのような疾患なのでしょうか。

鹿間　小児の急性熱性疾患の一つかと思うのですが、発熱とともに耳下腺、片方だけのこともあるし、両側腫れることもあります。耳下腺が腫れて熱を伴う病気というのがごく典型的な疾患のかたちだと思います。

池田　今、新型コロナウイルスのこともありますが、どのようなウイルスなのでしょうか。

鹿間　ムンプスウイルスという名前がついたウイルスです。ムンプスウイルスはそんなに何種類もあるわけではないのです。耳下腺に感染し耳下腺を腫れさせるウイルスの代表ではあると思うのですが、実はほかにも同じように耳下腺を腫れさせる可能性のあるウイルスが幾つかいるのです。

池田　そうですか。私は１つだけかと思っていました。気になるところは伝播様式ですが、どのような状態でうつっていくのでしょうか。

鹿間　主に飛沫感染でうつります。くしゃみ、あるいはおしゃべりをしたり、咳き込んだり、そういうときに唾液と一緒にウイルスが飛び散ってほかの人にうつることが多いといわれています。あとは、例えばおしっこなどにもウイルスが混じっているといわれて

いるので、これは特に院内感染対策などでは大事かもしれないですね。

池田　飛沫ということは、例えば感染したお子さんとかがしゃべって、テーブルや手などにつきますね。それも伝搬するのでしょうか。

鹿間　伝播の可能性はあります。

池田　飛沫プラス接触感染ですね。

鹿間　そうですね。ただ、飛沫によるものが一番大きいといわれています。

池田　よく教科書などで、麻疹などだと空気感染などありますが、ムンプスは空気感染はしないのですね。

鹿間　空気感染をすることがはっきりしている病原体はかなり限られています。はしかと水痘瘡と結核です。それ以外の病原体に関してはごく限られた条件下では空気感染に似たような伝播をする可能性はあるのですが、今申しました３つの病原体以外に関しては一般的には空気感染による広がり方はほとんどしないと考えていいと思います。

池田　お子さんに起きやすいのですから、流行性耳下腺炎の罹患者はだいたいお子さんなのでしょうか。

鹿間　ほとんど子どもの病気だと考えられていて、子どもの患者さんが圧倒的に多いのだろうと思うのですが、一つ注意しなければいけないこととして、ムンプスは感染症法で小児科定点の報告すべき疾患といわれています。つまり、小児科を受診した患者さんであれば数が報告されるので、かなり正確な患者数が把握できるのですが、小児科以外の診療科、内科、耳鼻科など、そういう診療科にかかられた場合には必ずしも報告の義務がないため、成人でどれぐらいの患者さんがいるのかは、実はあまり正確な数字は把握されていないのです。

池田　わかりづらいですね。最近ではワクチン接種が義務づけられてきているのですが、近年の罹患者数はわかっているのでしょうか。

鹿間　そういう意味で正確な数字がなかなか把握できない疾患ではあるのですが、ごく大ざっぱな数字として年間50万～100万人の間ぐらいではないかといわれています。

池田　そんなにかかっているのですね。びっくりしました。私はもうほとんどいないのかと思ったのですが、50万とか100万の単位ですね。診断について、どう行うのかですけれども、最近よくインフルエンザなどで迅速診断キットがありますが、そういったものは開発されているのでしょうか。

鹿間　残念ながらないのです。本当の意味で検査でムンプスだということを証明するために、よく使われているのが血液検査です。採血をしてムンプスウイルスに対する抗体価を調べることで診断されるかと思います。それ以外の検査法は全部保険適用外になってしまうのですが、例えば咽頭ぬぐい液

を提出し、RTPCRですとかウイルス分離ですとか、そういった方法で直接ウイルスを見つけにいく方法。さらには、ムンプスのよくある合併症の一つの髄膜炎の場合には、髄液を提出し、先ほどのRTPCR法やウイルス分離法、そういったものでムンプスウイルスを証明する検査で診断を行うことになるかと思います。

池田　ではまだまだ迅速診断キットは開発が遅れているのですね。

鹿間　そうですね。

池田　合併症での髄膜炎、恐ろしい問題だと思いますが、どのような治療をされるのでしょうか。

鹿間　ムンプスウイルス一般についていえることですが、そのウイルスに対する特異的な治療法というものはありません。ですので、髄膜炎であっても、普通の耳下腺腫脹を伴うムンプスであっても、対症療法しかないのです。耳下腺が痛い、あるいは髄膜炎の場合には頭痛や吐き気、そういったものが続いて、食べ物や水分摂取ができないような場合には輸液点滴を行う、あるいは痛みに対して鎮痛剤を使うかたちで、治まってくるのを待つしかないという治療法になります。

池田　悩ましいですね。対症療法になりますね。親御さんは心配されると思うのですが、髄膜炎になると、一部の方はちょっと重篤な結果になるのでしょうか。

鹿間　ムンプスの髄膜炎自体は予後は比較的良好だといわれています。ただ、ムンプスのそのほかのよりまれな合併症として、一つは難聴があります。聴神経そのものに感染してしまうような場合なのですが、ムンプスで難聴になってしまった場合は、聴神経そのものが障害されてしまい、残念ながらその後、回復が期待できないたぐいの難聴になってしまいます。

それから、比較的有名な合併症として、男子の場合は精巣炎、女子の場合は卵巣炎というものがあります。男子の精巣炎のほうが頻度が高いといわれているのですが、精巣炎の場合にはその後、思春期以降、精子の数が減るということがいわれています。ただ、ムンプスによる精巣炎で不妊にまで至ってしまうことはまれだといわれています。

池田　精子の数が一時的にある程度減ってしまうとはいえ、不妊治療が必要になるまではいかないかもしれないのですね。少し安心の材料ですね。それから、耳下腺が腫れてきたときにムンプス以外にどのような疾患が考えられますか。

鹿間　先ほど申しましたが、ウイルス感染した場合の症状として発熱に加えて耳下腺部が腫脹するものもあるといわれています。例えば、有名なものとしてEBウイルスというものがありまして、一つ症状として耳下腺が腫れ

ることが知られています。そのほか、ウイルス分離をしないとなかなかわからないのですが、コクサッキーウイルスとかパラインフルエンザウイルスとか、いわゆる上気道炎、風邪を引き起こすウイルスの中にも耳下腺部の腫脹を伴うような場合もあるといわれています。

それから、原因がわからない場合がほとんどなのですが、繰り返し耳下腺の腫脹をきたす反復性耳下腺炎という症状を呈する方もいらっしゃいます。あとは耳鼻科的な疾患、唾石症、唾液腺の中に石が詰まってしまうような病気とか、あとはもう少し年齢が上の方になると思うのですが、シェーグレン症候群などをはじめとするいわゆる膠原病で、耳下腺腫脹が症状の一つになるような場合もあるかと思います。ということで、鑑別を考え始めるとけっこういろいろ出てくると思います。

池田　鑑別の中でまず感染症を疑うときに、また幾つかのウイルスがありますね。これも迅速診断キットはないのですね。

鹿間　そうですね。周りでたくさん同じような子がいるようであれば、まあムンプスだろうと、それで終わってしまうケースも少なからずあるのです。逆に、周りでそういう子がほとんどいないのに、「この子、熱と一緒に耳下腺が腫れているのです」という場合には、いろいろ考えなくてはいけないかなと思います。

池田　いずれにしても、例えば膠原病のようなものを疑うとか、耳石が詰まるとか、あるいは感染症になると画像診断も含めたもの、あるいは血清を取って抗体を調べるとか、いろいろなことが必要になるのですね。

鹿間　そうですね。なので、これはムンプスではなさそうだなという場合、唾石症などの耳鼻科的な疾患はないかと、小児科、内科だけではなくて、耳鼻科の医師に診てもらうのも大事かなと思います。

池田　その場合、繰り返すというのがポイントなのでしょうか。

鹿間　いや、唾石症は必ずしも繰り返すわけではないのです。逆に繰り返している場合は、おそらくこれはムンプスではなかろうということで、先ほど申しました膠原病なども鑑別していかなければいけない。小児でも全くないわけではありませんので、自己抗体ですとか耳下腺以外の臓器はどうかとか、そういうところまで検査をしなければいけない患者さんも、まれながらいるかと思います。

池田　ありがとうございました。